座談会『花園大学文学部研究紀要』五十号に寄せて

二〇一七年度に『花園大学文学部研究紀要』が五十号という節目を迎えたことにちなみ、文学部紀要委員会（松田隆行文学部長〔当時〕、師茂樹委員）は、文学部をよく知る先生方にご参集いただき、文学部の来し方をふりかえりつつ、今後の指針となるようなご提言をいただきたいと考え、座談会を企画した（二〇一七年十二月十六日）。本来であれば第五十号に掲載すべきものではあるが、編集作業等の都合により、今号に掲載することとなった。掲載が遅れたことをお詫びするとともに、座談会にご出席いただいた先生方に記して感謝申し上げる。

出席者（敬称略）：西村惠信・塩見敦郎・芳井敬郎・松久ミユキ・師茂樹（司会）・藤井智（写真撮影）

文学部ができるまで

司会　本日はお集りいただきまして誠にありがとうございます。最近、新聞広告などでは「福祉の花園大学」というキャッチフレーズを使っていて、文学部の影が薄くなっています。

松久　今は福祉にニーズがあるからね。

西村　京都の大学でいちばん最初に仏教福祉学科を作ったのは花大だったんです。

司会　しかし、歴史をふりかえれば、文学部がこの大学を作ってきた、といってもよいかと思います。本日は、『花園大学文学部研究紀要』第五十号を記念いたしまして、文学部の歩みをふりかえりつつ、これからの文学部が元気になるようなお話をしていただければ、と思います。はじめに、本学で一番長く教鞭をおとりいただきました西村惠信先生からお話をうかがえればと思います。先生が花園大学に赴任されたのはいつ頃でしょうか。

西村　あれは一九五八年だったと思います。柴山全慶[1]という本学の教授をなさっていた老師を慕って私は南禅寺の僧堂に

入って修行したんですが、僧堂を出てからお会いした時、老師が「お前さん、勉強が好きだったら、今、池田（豊人）舎監さんが辞めるそうだから、あんた花大の寮の舎監に入ったらどうじゃね」と言ってくださいました。そんなわけで、思いもしなかった母校に帰ってきた、という次第です。

司会 なるほど。その時は文学部というのは……。

西村 そんなんありますかいな、仏教学部だけですよ。[2]

芳井 仏教学部だけでしたね。

西村 全学たった二百名の小さい大学だったんです。

司会 一学年五十人しかいなかったんですね。

西村 五十名定員で募集してましたが、実際は全学で二百名もいなかった。百五十名くらいでした。私が花園大学に入学したのは昭和二十七（一九五二）年でしたが、前の年の入学試験は面接だけだったと思います。何やらホルマリン臭い衛生室で面接があって、その真ん中にいたおじいさんみたいな人が、「ようこんな大学へ来てくださった」って言われてびっくりした（笑）。これでもう合格確実やと思いましたね。面接を受けたのはジェーン台風（一九五〇年）の翌年で、教室が傾いて突っ張りがしてありました（笑）。なんという学校やと思いましたね。それでがっかりしたけど、門を入ったところに銀杏があって、平瀬作五郎っていう先生の碑が建ってたんです。世界で初めて銀杏の精子を発見した人なんですが、私が卒業した彦根東高等学校は、これまた銀杏がシンボルで平瀬作五郎にゆかりがあって。[3] それで私は「あっ、花園大学と私は縁があるんだ」って思って落ち着いたけど、最初はなんちゅう学校に来たんかしらって思ってがっかりしましたわ。絶望からの出発です。ちょうど山田無文老師が学長になられてから四年目だったんです。河野太通老師はその頃四回生におられました。角帽を被っておられたのを憶えています。

司会 前総長の河野太通老師がおられたんですね。

西村 当時、月曜日の一講時目は全学が出席する学長の『碧巌録』の提唱でした。それがちょうど私が入学した年に始まって、四回生の時に百則がうまいこと終わったんです。学長の提唱が終わると、全学生が校庭に出て掃除をするんです。作務ですね。私が草をとってたら、横に学長が来られて一緒に草をとられた。この時初め

ていい大学だなと思いました。

司会　そういう雰囲気の大学に入学されたわけですが、他の大学に比べてどのような特徴がありましたか？

西村　こんな小さな大学は他にはありません。五つしか教室のない二階建て木造校舎が一棟。それも私が入学する前に床が抜けたりしたそうです。[4] 皆が出席とりに教壇のところへ集まったら床が抜けたらしいんです。電球が付いているのは一部屋のみで、他の部屋には電球なんかありませんでした。

松久　夜はろうそくですか？

西村　そんな夜までいませんから。[5] 二股ソケットを持ってきてやっていました。教室棟の他に本館と寮と食堂と図書館がありましたが、図書館の書庫以外は全部木造。後になって一つだけコンクリートの建物ができました。一九六三年にできた四階建ての図書館・研究室棟です。[6] 狭い校庭に二面のテニスコートもありました。そこから、卒業生のなかにデビスカップに出た兄弟もいたんですよ。

全員　へえ！

司会　どのような経緯で、文学部という名前に改称したんでしょうか。

西村　文学部ができる前に、仏教福祉学科というのを立ち上げました（一九六三年に設置認可、定員五十名）。福祉は京都では初となります。福祉を専門にされていた西原冨雄先生を迎えて、仏教学部は仏教学科と仏教福祉学科の二学科になりました。今、卒業生は皆んな施設の偉い方になっていますよ。今の社会福祉学部の学生はどこに行っても立派な先輩がおられると思います。あるいはもうリタイアしているかもしれませんがね。しかし、これではいけないということで思い切って仏教学部を文学部に組織替えしたんです。文学部になったのは一九六六年でしたね。

芳井　文学部に変わって、四学科になりましたね。

西村　仏、社、史、国です。

司会　仏教学科、社会福祉学科、史学科、国文学科ですね。最初に仏教学部には定員が一学年五十名しかなくて、その後仏教福祉学科で五十名が追加となり、その三年後に今度は学科が四つになった。年表によれば、仏教学科、社会福祉学科、史学科の定員がそれぞれ四十名、国文学科が三十名（合計百五十名）とのことですから、

数年で定員が三倍になっていますね。

西村　そう、あの頃、学生数がにわかに増えたんです。どこの大学も。[7]

松久　そういう時代だったんですね。

西村　だから花園大学もそうしないといけないっていうことで、文学部を作り、四つの学科を作ったんです。

司会　社会全体で大学進学する人の数が増えたから、花園大学も社会のニーズに応えるために定員を増やしたんですね。

西村　学生もたくさん来ましたよ。

司会　数年で定員が三倍なんて、今ではあり得ない増え方ですね。

西村　それが学生運動につながっていくんです。学園紛争と相まってね。いわゆる七〇年闘争ですね。

入試改革の試み

司会　時代の趨勢とともに、大学の需要が高まって、入学生が増えてきました。そんななかで、花園大学文学部の歴史を考える時に忘れてはならないのは、ユニークな入試をしてきたことだと思います。たとえば、かなり早い時期から漫画を使った入試がありました。どういった経緯でそれが必要だったんでしょうか。

西村　そういう変わったことをすればよいという世間の風潮だったんです。学問的なことではなく。論文を書かせる試験というのもやりましたが、当時としては非常に思い切ったことでした。

芳井　昭和五十（一九七五）年に新しい入試にして、それが「花園大の一次募集　学科試験やめます」っていうタイトルで『京都新聞』の記事（昭和五十年五月二十日夕刊）になり、その後も各紙に取り上げられたので、本学の名前が全国に知られました。それは国語・社会・英語という学科試験ではなく小論文入試にして、「受験体制のエリートは無用」「かけがえのない「個」をみつけたい」といった募集広告を出して社会にアピールしたんです。

西村　漫画を読んで感想を書きなさいっていう問題もありましたね。

藤井　それは二年後です。昭和五十年に小論文試験になったので、私たちが受験した時も小論文の試験だと思って受けに行ったら、出てきたのがジョージ秋山の『浮浪（はぐれ）

雲』だったんです。「橋の下で」っていうテーマで。

松久 よく覚えていますね（笑）。

藤井 だって受けましたから。

西村 学科試験をやめて論文試験に変えた。それは世にも斬新なやり方だったんです。そのテーマとして漫画を持ってきたということで、世間をまたあっと言わせたんです。漫画を見て、ジョージ秋山の『浮浪雲』を見て感想を書きなさいという。

芳井 このあいだまでそういう試験をしていたんですよ。[8] ビジュアルなものを出して、それについて何かを書かせるというのは、当時の試験のやり方を踏襲していたんです。

司会 それ以外にどのような試験をしていたんですか？

西村 『浮浪雲』の前にやっていた小論文のテーマに、「あなたはお正月をどう思いますか？」っていうのがありました。入学試験としておかしいなって思ったんやけど、実際に書かせてみたら、正月がうれしい人と、あんなものはくだらない、店が全部閉まっていて行くところがないっていう人がいることを、私自身初めて知りました。

松久 ああ、なるほど。

西村 お正月といっても、必ずしも皆がめでたいと思ってるわけではない、ということがわかった。

芳井 私は一九八〇年に本学へ赴任しましたが、その後、二、三度、小論文試験をしました。小論文試験についての小論文を書かせたこともあります。各大学で出している小論文を並べて、それぞれの傾向を書けって問題を出しました。それを見て「世も末」と言った教員もいましたが、当時、小論文試験がだんだんと時代のニーズに合わなくなっていたことは事実です。意味がなくなってきました。今でも小論文試験はやっているんですか。

松久 ありますね。残っていますね。

司会 そもそも、どうして小論文を始めたんですか。普通の試験をせずに。

西村 学力ではなく、もっと人間性を見ようとしたんです。

芳井 それは建前としてあるけれど、小さな大学でユニーク

な入試をして受験生を集めたいという気持ちがあった。当時の入試の体制、オーソドックスな入試のやり方に対するレジスタンスという意味もあったと思います。そういう考えに賛同する教員が本学にたまたま集まっていたんです。それが大きかったと思います。

司会 そういえば、『花園大学文学部10年資料集』には、「入試特別グループ『ユニーク』について」という文書があります（一九七四年六月付）。グループ名が「ユニーク」というのがユニークだと思いますが（笑）、そういうところで新しい入試を考えていたんでしょうか。

松久 面白い～！

藤井 小論文のほかにグループミーティングっていうのもありました。

松久 え、藤井さんが学生の時代に？　すごいな、進んでるな。

藤井 七七年、七八年の頃です。ある年のグループミーティングのテーマは、「お水」だったんです。水が入ったコップがテーブルの上に置いてあって、それについて十五人でグループミーティングをしなさい、というものです。そしたら、その水をいきなり飲んだやつがいたりね。それ合格ですわ。対策してきてる。

芳井 私はグループミーティングの採点を何回もしました。最初、誰もしゃべらへんから「みんな、話をしようよ」って積極性を売り込む受験生がいる。私はそういう人をあまり評価しなかった。しゃべらへん人に点をいれた。ひと言もしゃべらへん人でも、考えているかどうかが顔を見ていたらわかる。

司会 昨今流行のグループワークで評価されるタイプの人を、先生は評価しなかったんですね（笑）。しかし最近では、塾や予備校で面接やグループミーティングの対策をしてくれるみたいですね。そういうことをされると、「個」をみつけたい、という試験にならないですね。

芳井 そういうばかげたことを教えている。採点する方にも問題があると思いますよ。形式的な型で評価してしまうから……。グループミーティングを実施している意味がない。

松久 留学生を大学に入れても、アルバイトや仕事ばっかりしていて大学に来ない、そんな時代がありました。あの頃の留学生の面接は面白かったよな。面接の時、どのような格好をしているかを全部見て、採点してまし

た。

芳井　綺麗な格好をしているのは、逞しいのが多い。

松久　生きるためにね。

芳井　そうや。入国管理局にも行ったがな。不法就労だって言われて。下鴨神社の近くの裁判所に行ったり、茨木へ行って担当官に頼んだりして、救ったった。どうぞお願いしますって。その留学生に会ったら、「先生おおきに、ありがとう」って言ってくれた。

松久　山形の大学で留学生の問題があって、それから厳しくなったもんね。

司会　二〇〇一年に、山形県の酒田短期大学における留学生の不法就労問題が大きなニュースとなりました。あの頃ですね。

塩見　でも、そうやって仕事をやっとった留学生のほうが面白いやんな。

芳井　たしかに面白い。

学園紛争の頃

司会　先ほど西村先生が少し仰ってましたが、こういった入試改革をしていた頃というのは、学園紛争の時代でもありました。『花園大学文学部10年資料集』には、当時の団体交渉の記録などが残されています。一九七〇年前後と、一九七六、七年のキャンパス移転のころに大きな紛争があったようですが、どういうことから学生運動が本学で起こったのでしょうか。ちなみに、『花園大学文学部紀要』の前身となる『花園大学研究紀要』が創刊されたのが一九七〇年で、松久先生がオリンピックに出場されたのもちょうどその頃ですね（一九六八年メキシコ大会、一九七二年ミュンヘン大会、一九七六年モントリオール大会）。

西村　最初の七〇年闘争で頑張った学生は皆、仏教学科でした。

松久　そうだったんですか。

司会　年表を見ますと、一九六五年の台風二四号で、木造の本館の被害甚大となり、一九六六年に本館の新築が協議されると、本館改築反対運動が起きる。一九六七年には新築された本館の落成式があるんですが、その年に今度は学生会館の建設をめぐり全学ストライキが起きて、学生二十六名が処分されたそうです。その前後には、学費値上げ反対運動とか、白雲寮民主化闘争と

か、いろいろあったようです。その後、一九六九年に本館がバリケード封鎖されて、以後毎年のようにバリケード封鎖が起っています。

西村 本学は明治四年にできた旧い大学ですから、花園大学は旧体制の面を多く持っていました。その旧体制を粉砕せよっていうのが、仏教学科の学生でした。あの時学生と闘った大将は柳田聖山先生でした。柳田さんが初代の文学部長だったと思います[9]。それでもう毎日毎日、七十日間、ヘルメット被って覆面した学生に朝から晩まで徹底的にやられました[10]。ある時、教授会を開いていたら、なにやら音がする。おかしいなって思ったら、机をばーって積んでたわけです。バリケードができあがってから、学生が教授会の部屋を叩くので、何が起こったのかなと思って見てみたら、部屋から出られないようにロッカーとか机とかが積んであったわけです。どうやって出たかというと、窓から出たんです。一人だけお年を召していた西原冨雄先生は、かわいそうやから、窓から出られないから出してやってくれって頼んで（玄関から出してもらった）。柳田先生は学生に抱えられて、オイショオイショって窓から運び出されました。今でもはっきりと覚えています。どこへ行ったかというと、（一九六三年に）できたばかりの図書館です。その後、花園会館に行って、ご飯を食べながら「どうしたもんやろう、困ったなぁ」って（相談していた）。

司会 この頃は他にもいろいろありますね。一九六五年にはベトナム反戦僧衣デモ。一九六九年十一月五日には、「赤軍大菩薩峠事件で本学学生四名逮捕さる」とあります。

西村 中央執行委員会が、最後には佐藤（栄作）首相暗殺計画に入って、大菩薩峠で捕まった。警察の夜襲を受けて。捕まったのは全部仏教学科の学生でした。

芳井 もっと後のことですが、オリエンテーションしたら、いつの間にか学生の人数が減っていたと、仏教学科の先生から聞きました。どっかに逃亡してしまう。仏教学科の先生も大変やった。

司会 塩見先生は、キャンパス総合移転（一九七七年）の少し前、一九七五年に赴任されたとのことですが、当時大学はどういう状況でしたか。

塩見 どういう状況かがわからんかった（笑）。まず授業も、

どこが教室やったか覚えてない。

司会 授業がまともにできなかったみたいですね。[11]

西村 塩見先生も（教授会の部屋がバリケードをされたので）窓から出ていましたよね。

塩見 出ました（笑）。

芳井 私は一九八〇年に花園大学に来ましたが、その時はまだ学生運動のメンバーは残っていました。今では考えられないけど学内に学生新聞があったんです。

塩見 あった、あった。

芳井 で、各教員の名前が書いてあって、その評論をいちいち載せていたんです。この先生はどうやこうやって。

松久 へえ。面白いな（笑）。

芳井 教員はビクビクしていました、何を書かれるかわからないから。それから（学生運動のメンバーは）思想的に合わない学生を取り囲んだりしていた。私のゼミの学生のなかに、新選組の格好をしていた者がいました。史学科やからそういうのが好きな学生がいた（笑）。彼はやられました。（学生運動のメンバーは）休み時間に一般学生を取り囲んでオルグしてやろうと教室の外で待ってましたから、取り囲まれるのが嫌な学生が、私に「何とか授業を休み時間もやってください」って紙に書いて渡したりしていました。それから、囲まれて逃げられなくなった学生を、当時は図書館だった返照館にいた職員が、窓から部屋に入れて逃してあげていたのを見たこともあります。

藤井 私は休み時間にアジテートしてましたね。当時はマルクス研究会やレーニン研究会といった学習会があり、一方で民青もいました。歌声サークル「はとぽっぽ」っていうのが、ちょうど今の中庭の藤棚のあたりで、昼休みにフォークギターで「戦争が終わって～」って歌い出すと、学生会館からヘルメットにサングラス、手ぬぐいを巻いた学生が取り囲みにくる……。

芳井 そんな大学でした。その頃一番大きかった（事件）は、黛敏郎がやって来た時です。これは塩見先生の責任（笑）。あれは何の連続講義でした？

塩見 「日本の芸能」ですね。

芳井 そのとき黛敏郎を塩見先生が呼んできた。一九八一年

か一九八二年です。

西村 私はその時学生部長でした。黛敏郎は「君が代」を絶賛する音楽家だったから、やめろっていう学生たちの反対です。

芳井 私も学生委員でした。そしたら案の定、赤ヘルが並んで、黛敏郎を入れないように正門をバリケードした。返照館の三〇〇番教室が会場でしたが、消火器まかれて、ガラスを割られて……。会場は急遽、講堂（擇木館。現在の自適館の場所にあった）に変更しました。

藤井 機動隊も来ました。

西村 呼んだ、呼んだ。学生部長だったから。

芳井 対応が面倒だから、ちょっと用事あるって言って、学外に出て行く先生もいた（笑）。その時に事務局長をしていた佐野大義さんが、正門前で「君らがそのバリケードを解かないと、そこに機動隊の警察が並んでる、彼らに逮捕してくれと言うぞ、いいか」とパフォーマンスをしたら、やっとバリケードを開けた。そこに黛敏郎が入ってきて。慣れているのかそれまで門の外でチーンと立っていた。思い出すわ。えらい大学やなって思った。

松久 どうして塩見先生はその方を呼んだんですか？

塩見 日本の芸能を歴史的にやろうっていうことで、上田正昭さんとか、藤山寛美さんとか、黛敏郎さんとかを呼んだ。公開講座としてやってました。

司会 豪華メンバーですね。

松久 いい大学だったんですね（笑）。私は知らない時代です。

塩見 「日本の芸能」というのは、大学の講義を公開して、一般市民の人にも参加してもらう、という公開講演、公開講座だった。その頃、市民公開講座というのは日本でもほとんどやってなかった。その後、「日本の芸能」「日本の農業」「スポーツと人生」と続いたんです。

芳井 当時、一般教養は人文系、社会科学、自然科学などに分かれていて、三分野からそれぞれとらなければいけない、ということになっていた。その三つの分野にあてはまらない総合講座というのを塩見先生らが立ち上げた。

藤井 私が教務課一年生の時にその総合講座の担当だったんです。黛さんを呼ぼうっていう話になった時に、黛さんの事務所に電話したりしたのは教務課一年生の私の係でした。

塩見　講座を録画したビデオは図書館に寄付したと思う。あの時、「日本の芸能」の全記録を活字にして、ＣＤにしてくれた学生がいて、それも全部図書館に寄付したよ。

個性的な教員

司会　学園紛争のなかでも、特色ある授業をしていたんですね。塩見先生は中国語の先生として赴任されたんですよね？

塩見　そうです。一九七五年四月、その時に入った研究室が西村惠信さんと一緒だったんです。当時は第一外国語と第二外国語が他の大学と逆で、英語が一週間に一回、中国語・ドイツ語・フランス語が週二回でした。

芳井　全国的に珍しい。

塩見　私はそれより前に北京の第二外語学院で中国人に日本語を教えていました。今は中国の蘇州大学と提携していますが、第一回目の訪中団みたいな感じで単位関係なしに学生を何名か連れて、北京の第二外語学院に行きました。その二、三年後には中国語現地実習という授業になりました。

藤井　私も八六年に行っています。教務課の職員も一緒に一ヵ月中国に行ってたんですよ。僕は実は初級のドイツ語を西村先生に習いました。

司会　第一外国語と第二外国語が逆だなんて、特色があったんですね。

藤井　そうなんです。他の大学とちょっと様子が違って、それがすごく面白かったです。さっきの中国語現地実習で言えば、八六年に行った時には三十名の予定が六十名になった。でも学生が登録してるのに三十名に絞るわけにはいかないので、塩見先生は北京の第二外語学院、就任して間もない衣川（賢次）先生が第一外語学院という具合に、二つのチームに分かれました。八月に三週間授業を受けて、その後研修旅行で一週間。いろいろなところに行きました。その中で勉強がそんなにできない、高校も行くところがなくて花園大学に来たような連中が、現地に残ったり、現地の大学に留学したり、今では中国の貿易関連の仕事をしていたり、っていう学生がいっぱいいた。塩見先生が中国に連れて行かなければ、その道はなかったと思います。僕はずっと長く大学にいますので、そういう学生をよ

うさん見てきました。

芳井 学園祭でも塩見先生が活躍した。私が来て二年目くらいに、学園祭にゼミで模擬店を出した。ゼミの学生が鞍馬の豆腐を買ってきて、湯豆腐と酒とで百五十円で出したんです。そうしたら、どんどん売れて、豆腐が足りなくなってしまい、その辺で調達して。焚火をしたら、学園祭で焚き火はダメって言われて。塩見先生が夜回りをやっていた。

松久 塩見先生は学生が大好きでしたよね。

芳井 そう。

松久 でも怖かった。いつも叩かれた（笑）。

藤井 塩見先生の左には座るなって言われてました（笑）。

芳井 この先生のところへ行ったら、授業のない時分には昼間から酒を飲んでた。いつも塩見先生に呼ばれて飲んでいた。面白かったがな。

塩見 大学に来たら、僕の研究室で学生が集まって酒を飲んでた。いっしょに酒を飲んで、僕は授業に行ってた。授業が終わるまでちゃんと残しとけよって言って。

松久 今やったら大変なことになってるでしょうね。

司会 塩見先生は、中国の漢詩とかはお酒を飲まないと理解できないって言って、飲みながら授業されてたって聞いたことがあります（笑）。

塩見 そういうこともあったかもしれない。

一同 （笑）

西村 塩見先生は多少、毛沢東がかったところがある。文化大革命の影響で、大学が大切にしている校地の一角を、学生を呼んで掘り起こして畑を作らせた。鍬を持ってきて畑を作るもんだから、佐野（大義）総務部長が「誰の許可を得てやってるんだ」って烈火のごとく怒りましたよ。

芳井 これが禅の作務やがな。

藤井 「収穫祭」と言って芋堀りに行ったりしてましたね。

松久 情熱的な先生でしたね[12]。

芳井 本学には、そういう教員一人ひとりのキャラクターっていうのがあった。

司会 強烈な個性ですね。

芳井 先生の個性というものが花開いて、それが授業に反映されていたんではないか。文科省は「一人ひとりの個性を伸ばす教育」とか言ってるけど、かえって今は画一化された教育になっているのではないかと私は心配

しています。当時は変わった人がいました。

松久 そう。変わった人がいっぱいいた。

芳井 国文学科の土岐（武治）先生、朝になったら裸足でキャンパスを歩いてはりましたなあ。運動してはった。朝六時には大学にいて、裸足でぐるぐる回っていた。

司会 土岐先生のお名前は、今も土岐文庫（日本文学科共同研究室）として残っていますね。

芳井 今のトレーニングルームのところに、池があったんですが、高崎正芳先生と藤吉慈海先生がうっかり落ちたから、池をなくしたんですよ。その一、二年前に全盲の学生が入ってきて、ここに池があると危ないとなったんですが、噴水みたいに音が出るものがあれば大丈夫だから気になさらなくて結構です、と言われたので、池のまわりに石のベンチをいくつか置いて、水が出るポンプを入れた。それでやれやれ大丈夫となった。

司会 石のベンチはまだ残ってますね。

芳井 今、自適館があるところにC号館というのがあって、スロープになっていた。それを藤吉先生が本を読みながら降りて、そのまま池に入りはった。ボションって。高崎正芳先生と藤吉慈海先生が相次いではまりはって、これは危ないってなった。

司会 漫画に出てくるような先生がいらっしゃったんですね。

学生の力

藤井 その頃、釣り同好会っていうのがあって、その池にどっかで釣ってきた魚を放したり、学園祭のあとに金魚を放したりしてた。

芳井 どうしてうちの大学にあんな立派な石のベンチあると思う？　普通のベンチやったら学生が持って帰るから、だから絶対に学生に持って帰られないように石のベンチになった。それから当時、トイレの鏡も一枚もなかった。学生が持って帰るから。そんな大学やってん。

松久 （笑）

藤井 そうやって大学でアホなことしてても、ものすごいことをやってるやつらがいてて、スポーツでも実はインターハイに出て優勝してるような経歴の者がゴロゴロおったんですよね。

司会 先ほどもデビスカップの話がありましたね。今までの話を聞いていると、バリケードを作ったりお酒を飲んだりと、かつての花大生に活気があったことはわかり

ますが、スポーツも盛んだったんでしょうか。

藤井 準硬式野球部は歴史が長くて、今の硬式野球部ができるまでは優勝していたり[13]、日本選抜でグアムに行ったりしていた。私が学生だった頃ですから一九七〇年代。

司会 学内でバリケードを作っていた一方で、準硬式野球部がグアムに行ってるんですか？　どこで練習していたんですか。

藤井 グラウンドでしていましたよ。無聖館もなくてもっと広かったですから。

松久 スポーツって毎日毎日、同じ練習をする。そういうのはまさに花園大学にぴったりのことだと思っていました。修行みたいなものです。

司会 松久先生が大学に来られたのはいつ頃ですか？

松久 昭和六十三（一九八八）年に赴任しました。私は面接で、お棺に足を突っ込むまで来てくれって言われました。ただ私は、あまり大学の教員はしたくないなと思っていたんです。スポーツクラブでオリンピックとか世界選手権に出場するようなジュニアを育てることに夢を持っていました。日体大を出た後に二年間教員をしましたが、教員では夢を叶えることができないと思い、京都のスポーツクラブに来たんです。そこでオリンピック選手が育っていったから、これは最高やなって思っていた時、ちょうど四十歳の頃に、花園大学からできたばかりの体育館を使って活躍してもらいたいっていう話をいただいたんです。

芳井 その時には強化クラブがなかった。そのために新体操を強化クラブにするということを松久先生に頼みに行ったんです。でも松久先生は器械体操の専門家。体操を大学生に一から教えるのは無理でしょうということで、新体操をやることになった。

司会 なぜ新体操だったんですか？

芳井 花園大学の売りになるものはないかと考えていたんです。

松久 体育館を使う競技のなかでは、体操とか新体操が華やかでしょう。それで、体育館（真人館）のオープニングの時に新体操を呼んでくれっていうことでした。

藤井　秋山エリカさん[14]。

松久　東京女子体育大学のルートがあったから、連絡して（真人館の）柿落（こけら）としのために来てもらいました。当時は私もまだ踊ってたから、四名で踊って宙返りとかもしました。

芳井　それで新体操が強化クラブになった。

松久　私が来た時は、新体操という種をまいて、大学が色々な援助という水や栄養をくれて、学生が四年になった時に花咲いた。ああやっぱりすごいなっていう感動がありました。

芳井　その後、ラグビーを強化クラブにした。剣道部は、後援会のほうから強化クラブにしてほしいという要請があった。従来から頑張っていたのが野球部。それで四つできた。

松久　当時、甲子園に出た学生が何人かいたんですが、そのなかのひとりが私の家まで来て、硬式野球のクラブを作りたいって言ってきた。でも三人しかいないということだったので、最初は同好会として活動していた。同好会として一年間活動すればクラブとして認められるっていうルールがあるから、グラウンドでキャッチボールでもして、活動している姿を一年間見せなさいって言ったんです。そうしたら本当にそれを実践していた。それで、二年後にクラブを作るときには人が揃ったんです。学生の行動力はすごいです。野球は競技人口が多いですし。

芳井　だから強化クラブにしたんや。それが功を奏して神宮まで行った。成功した。

司会　学生の力はすごいですね。

松久　今でも、新体操部からシルク・ドゥ・ソレイユに行くとか、そういうのがやっぱりいるからね。

芳井　史学科、文化遺産学科の学生もがんばっていた。よくいろいろなところに調査に行きました。

司会　考古学研究室も実績をあげていますね。

『花園大学研究紀要』の創刊

司会　一九七〇年に、いろいろな問題がたくさん起きているなかで、本誌の前身となる『花園大学研究紀要』が創刊されました。年表を見ると、一九六〇年代以前は、先生方が海外に行く記事が比較的多く載っています。緒方宗博教授のシカゴ大学留学（一九四九年）、同教授

がワシントン大学・ミシガン大学の交換教授のために渡米（一九五七年）、久松真一教授がロックフェラー財団の招きでハーバード大学客員教授として渡米（一九五七年）、西村先生がペンシルヴァニアに留学（一九六〇年）、平田高士講師がミュンヘン大学へ出講（一九六一年）、小林圓照先生のインド留学（一九六三年）などなど。一九七〇年代になると学園紛争の記事が多くなり、留学などの話が出てこなくなります。そういう激動の時代に研究紀要を立ち上げたんですね。

西村　そのころの花園大学は激動の時代だけど、教授会にはアカデミズムが盛り上がってきていました。もともと教授会もなかったような大学で、一九五八年に私が入ったころには研究誌というものもなかった。でもそのあたりから、ちょっとアカデミックな雰囲気が教授会の中には出てきました[15]。学生にいじめられたから、教授会同士の結束というのもあったんです。せめてアカデミズムくらいは、ということでやったんでしょう。

司会　学園紛争への反発で研究が盛り上がった、といった感じでしょうか。

西村　そうそう。

文学部で学ぶということ

司会　近年、文学部に対する風当たりが強いです。安倍晋三首相が「学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う」と述べたり（二〇一四年）、国立大学の人文社会科学系学部の組織見直しを求める通知が文部科学省から出たり（二〇一五年）しています。そんななかで、文学部の存在意義、特に花園大学文学部の存在意義について思うところがあればお話いただければと思います。

芳井　人生と共に文学部にいたことの意義を。

西村　現代は、生産性のあるもの、実利のあるものばかりめがけている時代。人間として生きていくのはそれだけではない。目に見えない世界のことも考えないと人間らしくない。物質的なものだけを追い求めるのでは人間としてダメだと思うから、金儲けにならない部分に目をつけてほしいなと思う。文学や日本史の勉強したって金儲けにならへんのやけど。（出席者を指して）見てみい、みな貧乏やってるやろ（笑）。

一同　（笑）

司会　塩見先生、文学部で他国の文化を学ぶことの意義には

どのようなものがあるでしょうか。

塩見 やっぱり今感じるのは、マルクスやエンゲルス、特にエンゲルスの発想については考えさせられる。つまり（マルクス、エンゲルスが主張した）古代の封建制から近代・現代という歴史の動きっていうのがね、世界に当てはめてみると、怖いぐらい当たってる。

司会 それは、古典の力みたいなものでしょうか。

塩見 マルクス、エンゲルスが洞察した世界は、失敗してしまったけど、それでもずっと世界がその方向に動いているということは間違いない。そういう観点で見た時に、中国には民主主義社会というのがなかった（のがマルクス、エンゲルスの考えた社会主義社会と異なる）。民主主義社会が完成した時に社会主義社会が生まれるという図式が、マルクスやエンゲルスにはあるんだよ。それが中国にはない。つまり封建社会がそのまま社会主義社会になっていった。そういう意味では、現在の中国は共産党王朝。

芳井 王朝と同じですか。

塩見 そういうことを考えていった時に、中国を学ぶ意義みたいなものがある。

司会 西村先生もよく外国に行っておられたじゃないですか。今の学生は、あまり留学に関心がないようです。

西村 そういう影響を及ぼしたのはコンピュータです。

一同 ああ。

西村 私が外国に行った時代はインターナショナリズムの時代。インターナショナリズムは、日本なら日本の文化を外に広げる、ということ。今はインターナショナリズムじゃなくてグローバリズム。これは反対！　グローバルリズムとインターナショナリズムは原理が違う。グローバリズムは（各地域の）文化や伝統を破壊する原理です。

芳井 均一化ですな。

西村 均一化や。なんていうのか、民族色というものがなくなりました。どこに行っても同じことをやってる。どこに行ってもスマホですよ。

芳井 一人ひとりの価値観を確立するために、文学部というのはあると思う。明治時代になって、理学や医学（などの理系の学問）を西洋から学んできたわけです。でも、そういったことを学んで、社会で活躍していた人も、扁額とかそういうところに書く時は漢語を書いている。

これは明らかに、（中国古典などから得た）自分の価値観を投影させているわけですよ。明治時代のエリートというのはそういうのを持っていた。それが百何年経って消滅した時代が今日です。生活が豊かになったことによって、人として生きるべき道とかそういうものを求める気持ちがなくなったというのが、文学部の低迷の始まりです。我々の大学時代でも、まあそれなりの大学生活を送っていたとしても、哲学などに憧れて（哲学書などを）読みこなすということが学生の一つのステイタスだった。そういったものを読んで、人間の生き方はどうかっていう価値観を追求する。明治時代の人と同じようにそういうものがあった。今の文学部の学生はそんなことを求めなくなってきた。受験勉強の最たる成功者である官僚たちが、文学部は意味がないって言うようになってしまうわけやな。

西村 僕が思うのは、文学というものは民族の固有性に基づいている。関心であろうと風俗習慣であろうと、それで成り立っている。それが今日では塗り潰されてきた。哲学における普遍的な人間の生き方、「真理とは何か」といった問いは、いくら国際社会になってもグローバルになっても平気だけど、着物の文化とか、そういうものまで普遍化しちゃってる。京都を歩いてみぃ、皆が着物着てるがな。着物が持つ固有の意味とかがどこかへ行ってしまって、ファッションになってしまっている。ボーダーレスです。西洋人が着物を着てるんだもん。私らはビフテキ食ってるんやもん。文化性がないんですよ。

司会 お金を払えば買えますからね。

芳井 「どのように生きるべきか」というものまで、今はマニュアル化されてきているんですよ。

司会 ふり返ってみると、花大文学部の学生は、「自分はどのように生きるべきか」「本当の豊かさとは何か」「自分が住んでいる国をどうすべきか」「民主主義って何だろう」といったことを真剣に考えていたからこそ、バリケードを作ったりしてたのかもしれませんね。同じように先生方も、個性を重視する入試をやったり、他にはない授業をしようとしていた。

一同 うん。

芳井 その通り。

司会 でも逆に今は、どうやって生きれば楽なのか、儲かる

のか、といったことがマニュアル化されている。スマホを見たらそういったマニュアルが手に入るわけですから、そういう時代に「自分とは何か」なんて考えようと思うわけがない。

塩見 皆、平均化してる。

松久 あまりにも情報化が進み過ぎてるということやね。

司会 でも、それはなくなっていいものなんでしょうか。

松久 今の学生に「何になりたい」って聞いても、（答えが）返ってこないもんね。「何でもいいです」とかね。これをやりたいっていうのがないの。それが私は歯がゆい。外から見たら、パソコンを使うのもすごく上手い、制作するのも上手い、そっちの道で活躍できるんじゃないか、という学生が何人もいる。でも、彼らにはそれがわからない。あまりにも豊かすぎて、いろいろなものが何でも揃ってるから、満足してしまっている（ように見える）。

司会 では、このような平均化した社会のなかで、かつての花大文学部にあったような個性を重視した教育を取り戻すために、どんなアイデアがあるでしょうか。

西村 先生がユニークな人であること。コンピュータみたいな先生はダメですよ。教員がいかん。昔ある禅学の先生は、学生に愛宕山へ登りましょうと誘われて、「ようし、行こう。愛宕山登ろう」となった。勉強よりもまず焼酎を飲め。それから愛宕山に真っ直ぐ登れ。無茶苦茶な先生やけど面白い。学生は信頼しよる。後に残りますよね。

松久 先生もかなわんで、こいつ（スマホ）のほうが先に知っとるから。あれはかなわんね。先生は何を教えるべきか。知識を教えたらあかんよ、生き方を教えな。知識があるだけじゃ全然ダメよ。これを調べたかったらこういう辞書があるからそれを引きなさいって、辞書の引き方だけ説明したらええんや。方法論さえ教えたらそれでいい。「漱石を知ってるか。漱石で一番面白いのは『こころ』だよ。俺はあれを読んですごく影響を受けたんだよ、わかるだろ、おい嵐山行こう」って、そういうのがいい先生やで。

芳井 そしたらその本読んでみようかなって思うわね。

松久 基礎的なものを教えるのは必要ですよ。ただし、その背景には、学問をするということはどういうことか、一人ひとり（の学生）が自分で考えないかん。それには

教員が、自分の専門にいかに取り組んでいるか、それがどういう意義があるか、ということを学生に知らせないといけない。

西村　知識の切り売りは絶対ダメやなあ。俺はどう生きてきたか、ということを見せる。それが面白い。

塩見　今は読んだら分かる話ばっかり。

芳井　読んだら分かる話ばっかり講義してたら、何で大学に来る必要があるのか。

司会　今は一年間で話す内容を、事前にシラバスに書かなければいけません。研究や調査をしていたら、シラバスに書いていないことを授業で話したくなるじゃないですか。でもそれを授業でしゃべると、シラバス通りに授業をしてないって評価されるんです。

西村　あほな。

塩見　そんなことやってるの？

松久　十五時間分、全部書くんですよ。

藤井　僕らが学生の時は「この先生、何考えてんねんやろ」みたいなことを思っていたし、自分の専門に取り組む姿勢みたいなものを学生からも求めていた。それが最近、先ほどお話に出たマニュアル的なものによって、どんどんなくなっていってる。文科省がそれを推進しているように思う。

西村　小さい大学やから、思い切って現代のセンスに合う教学規範を持ったらいいと思うけど。

松久　昔の先生方って、侃々諤々言い合うけど、仲が良かった。今はそういうところがないかもわかんないね。

司会　話はつきませんが、時間になりましたので、このあたりでお開きにしたいと思います。本日はたいへん興味深いお話をありがとうございました。

関連略年表

年	出来事
一九四九年	臨済学院専門学校を花園大学に昇格。仏教学部仏教学科を設置。奥大節老師が学長を辞任、山田無文老師が新学長に就任。
一九五〇年	ジェーン台風で本館講堂が傾く。
一九六三年	図書館落成。
一九六四年	仏教学部仏教福祉学科を設置。
一九六五年	ベトナム反戦法衣デモ。台風二四号のため、本館（木造）の被害甚大。
一九六六年	仏教学部を改め文学部（仏教学科・社会福祉学科・史学科・国文学科）を設置。本館改築反対運動。
一九六七年	白雲寮自治化闘争。学生会館建設をめぐり全学ストライキ、学生二十四名を処分。
一九六九年	学生会館竣工。七十日間長期団交。赤軍大菩薩峠事件で学生四名が逮捕される。
一九七〇年	『花園大学研究紀要』創刊号（二六号、一九九四年まで）。安保粉砕全学ストライキ。
一九七四年	入試委員会内に特別グループ「ユニーク」発足。
一九七五年	入試改革案「一次は小論文のみ」決定。
一九七七年	京都市中京区西ノ京壺ノ内町に総合移転。
一九九二年	文学部社会福祉学科を改め、社会福祉学部社会福祉学科を設置。
一九九四年	大学院文学研究科（仏教学専攻・日本史学専攻）修士課程設置。
一九九五年	『花園大学研究紀要』を『花園大学文学部研究紀要』に改称。
一九九七年	大学院文学研究科（国文学専攻）修士課程設置。
二〇〇〇年	大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程設置。花園大学歴史博物館設置。
二〇〇二年	文学部仏教学科を文学部国際禅学科に名称変更。
二〇〇八年	文学部史学科・国文学科を文学部日本史学科・日本文学科に名称変更。文学部文化遺産学科・創造表現学科を新設。二学部七学科体制とする。
二〇一三年	文学部国際禅学科を文学部仏教学科に復称（名称変更）。
二〇一五年	花園大学文学部改組にともない、文化遺産学科・創造表現学科の二〇一六年度以降の学生募集停止を決定。

参考文献

花園大学企画室『花園大学文学部10年資料集』（一九七七年）

花園大学三十年史編集委員会編『花園大学三十年のあゆみ』（花園大学、一九七九年）

注

(1)『花園大学三十年のあゆみ』二六一頁に略歴あり。

(2)もともと文学部として申請したが、文部省（当時）の指導により仏教学部になったようである。「そして十一月、文部省の審査官が来て審査をした。（中略）文学部として届けを提出したが、仏教学部に改めるようにいわれた。そして翌一九四九年（昭和二四）二月二十一日、ラジオ放送は「花園大学等一四七校新制大学許可」を報じたのである」（『花園大学三十年のあゆみ』四三頁）。

(3)平瀬作五郎（一八五六―一九二五）は、帝国大学（現・東京大学）で技手として勤務していた一八九六年、イチョウの精子を発見した。一八九七年に彦根中学校（現・彦根東高等学校）の教員となっている。その後、花園中学の教員として赴任されたようである。

(4)「何分にも旧校舎は老朽の極に達していた。戦時中は学校工場となり、一階の床をとり、そのためにけたがゆるんで戦後になって二階が落ちたことがある。落ちた学生も大怪我がなくてすんだ。けたがはずれていたのかどうかは、天井裏のことで誰も気がつかなかった。今ならやかましい問題になるところである」（『花園大学三十年のあゆみ』五二～五三頁）。

(5)「嘘のような話であるが、仏教学部時代には専任教員の研究室というものがなかった。専任教員も、非常勤講師として週一、二度来学される学外の人と一緒に学長室兼教授控え室で休息する程度で、講義と会議以外には自宅で学習をされたのであった。木造の旧図書館の二階の小部屋を改造して一人黙々として研究に勤しんでいた横井講師（現柳田聖山京大教授）はむしろ例外中の例外であった」（『花園大学三十年のあゆみ』二五七頁）。

(6)『花園大学三十年のあゆみ』四八～五一頁参照。図書館建築について議決された一九六〇年五月二十五日の創立記念日には、鈴木大拙による記念講演「東洋思想の特殊性」があったという。

(7)「新制大学発足直後の一九五〇年、全国の四年制大学は二〇一校、学部学生数は二二万二千人であった。それが二〇年後の一九七〇年には学校数三八二と九〇パーセント増、学生数では一三四万余と実に五〇〇パーセント以上の延びであった」（『花園大学三十年のあゆみ』九四頁）。ちなみに文部科学省の統計によれば、二〇一七年度の四年制大学数は七八〇、学部学生数は約二五八万人。

(8)自己推薦入試で行われたビジュアルリテラシー試験などを指す。

(9)一九六八年にそれまでの学監制度にかわり、三部長制度となる。初代文学部長・柳田聖山教授、総務部長・木村静雄教授、学生部長・大石守雄助教授（『花園大学三十年のあゆみ』八五～九四頁参照）。

(10)一九六九年九月十六日から十二月一日まで、七十日間の長期団交が行われた。『花園大学文学部10年資料集』四三～四八頁に経過が記録されている。

(11)キャンパス移転時の状況については、『花園大学文学部10年資料集』四九～五一頁、『花園大学三十年のあゆみ』一五六～一六五頁参照。

(12)塩見敦郎先生を送る会『天高雲淡　塩見敦郎故郷（はなだい）16年』（一九九一年。花園大学図書館所蔵）参照。

(13) 一九五一年、京都六大学軟式野球秋季リーグ戦で優勝。

(14) ロサンゼルス・オリンピック（一九八四年）、ソウル・オリンピック（一九八八年）などに出場。現在、東京女子体育大学教授。

(15) この頃、『禅文化』が一九五五年に創刊。一九五九年には日本印度学仏教学会第十回大会を本学で開催している。『禅学研究』については、「一九二五年臨済宗大学創刊になる『禅学研究』は、花園大学文学部になって以降も継続し、七〇年三月の第五八号をもって休刊したが、七八年に五九号が復刊され、再び継続されることになっている」とある（『花園大学三十年のあゆみ』二九〇頁）。